

里隔りし徒と呼ぶ港の岸に移りて、ここより枝舎に通いたり。

かくて海邊に止りて居ること一月、一月の間言葉かば寸程の人、讀りしは片手に数うに足らず、その重なる人は宿の主なり。

或夕、雨降り風起ちて磁打つ波音もや、高きに、独を舐みて言葉少き教師もさすかに物寂しく、二階なる一室を下りて主人夫婦が足投げ出して涼み居し縁先に来りぬ。夫婦は灯つけんともせず寸暗き中に團扇もて蚊やりつゝ、語り。教師は見て珍らしやと坐をゆぶりつ。夕暗の風軽く雨を吹けば、一滴二雨を掛りて三人は心地よげに受けて四方山の話に入りぬ。

明治三十一年四月(二十八才) 小品「忘れ得ぬ人々」を國民の友に發表しました。

同年八月、小説「渡科」を家庭雜誌に發表しました。

住居は東京渋谷でした。

明治三十四年三月(三十一才) 小品「小香」を真藏野に發表しました。番匠川や元越山(五八三米)など自然美に忠実に佐伯での生活を追慕した作品でした。

明治三十七年三月(三十四才) 小説「春の鳥」を女学世界に發表しました。

翌日は城山ですし、下宿していた家の少年に注いでいた愛情がら生まれた作品です。

明治四十一年、三十八才の若さで、その短い生涯を閉じました。

独歩は、佐伯の風物をこの上なくいつくしみ、土曜、日曜毎に山野(城山、榊神社、天海山、元越山、金比羅山、浦代峠、鶴見半島、離山、岩倉、木立、米水津村、

青山、番匠川、佐伯湾、葛港、四坪、五所明神社。そのほかには阿蘇山などへと跋涉しました。

その徒脚ぶり、その樞密心には感嘆するばかりです。佐伯滞在十か月の生活が、彼の一生涯を左右したとバツては過言ではありません。それほど、独歩と佐伯は深い関係にあります。

研究

浜後井路の開鑿

―林の水利史をさぐる―

会員 高橋 智

佐伯藩六代城主毛利爾守高俊公は、産業の奨励に關心をもつた藩主として知られているが、浜後井路通水も丁度この藩主の時代のことである。

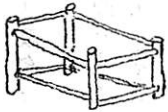
私達の郷土田中野村は山村の左に平地地帯を占め、当時水田として使われていた。谷川の流れと利用し、溜池を掘りつくりした追田(さこだ)のみで、重要産糧たる米を生産は微々たるものであった。それでこの村の平地に番匠の水を引き入れて米作に用いたなら、波寄、三股津留の二十町歩をこえれば良田が得られて、各地を合せると約四十町歩をこえる良田が得られて、米の増産は飛躍的に増大し、村民はもとより藩として米額を収養となることを着目し、これが工事計画を立てたのは大庄屋河野勘左工門(半五郎)と、豊南高校教諭河野忠雄氏の先祖)であると言われている。

これより年代がわさかづかぬが、三代高久公の時代には小林九左工門によつて小野井路が元禄四年(一六八七)に完工し、宝永九年(一七〇二)には鬼ヶ瀬井路が完工している。その他番匠川流域の土

たる水路としては、因長で日堂の湖洋留、中野で日波寄三股洋留、切畑で日網田、宮歌洋留に通ずる各水路工事計画が持たれており、これは元祿のはじめ頃すでに一志の調査測量がされていたと謂われるが、日田、鬼ヶ原水路は平坦地の掘鑿であった。

これに引かえ、浜後水路（小川入より三股まで約六廿）や常盤井路（笠掛より宮脇まで）は何れも山裾を繞つて、岩盤の多いところを掘鑿せなければならぬ。左め相当の難工事が予想されたが、浜後水路については大庄屋河野勘左エ門の熱意により藩士の許を得て、享保十五年（一七三〇）三月工事に着手し、波寄、宇津々、三股の部民を使役してこれを督励し、享保十八年四月滿三年の日數と延數千人の人数と要して完工したと伝えられている。どうしてそんな大工、かかつたかと思われるが、この工事は岩盤の露出箇所が多く、火葉やマイトを使わない只鑿と鉋を以ての作業は、石一升米一升と謂われる程、岩石の掘鑿は難工事の連続であつた。それが左め部民の一部にはこの工事の完成を疑い、不平をとなえるもの、怠ける者が續出して、大庄屋をはじめ工事監督に従事する世話人の勞甚は一通りではなかつたと伝えられている。然し通水の完成と共に部民の喜びはもとより、工事責任者である河野大庄屋並に世話人に対して、藩主高陵公は大いにその功勞を賞して感狀を賜つたとのことである。

又横堰はどうしたかと云うと、松の水の径四五寸位、高さ四尺位、それで四ノ上二に三尺五尺角位のおくをつくり、これを横堰に三列位に並べてその中に杖（くい）を打つてとめ、おくの中に出来るだけ大きな石を入れて流れをせきとめることにしていた。私も青年のころ横堰の修理に絶出の部落の人達にまじり、出来るだけ大きな石を、石ついにに入れて入でかつたが、脊板（かゝるいのこと）にのせて背負



い、かくらぶをたもつたであつた。

こうして造つた横堰も秋になると洪水のためにその大半は押し流されて平坦な川原となり、それを又四月頃になると前記の通り松の木で造つたおくを入れて修理し、毎年々々同じことと繰返してはしたが、昭和二十一年の横堰もコンクリート工事で堅めたので、もう洪水で崩壊するようになつた。

又水路も毎年崩壊の箇所や漏水が甚だしく、漏水には石灰、粘土、砂（三把）をぬりか左めて修理をしてきた。中でも浜後の横堰から四五百米下つた長石というところは、丁度山裾の岩石が出張つていて、洪水の時には濁流のつぎ廻し地点となつていて、毎年大修理を要していた。ここに明治初年以降幾回の大洪水に水路が大破し通水困難となつたので、明治三十九年当時の大世話人河野寅五郎氏（後の中野村長）外数名の世話人が發起し、長石隧道工事を計画し、工費五百二十圓を投じて、工事請負人松浦栄太郎をして約三十米の隧道と、三十米の暗渠を施設して翌明治四十年四月工事を完成し、甬水通水に支障を来さない様になつた。

更に昭和三十一年から三十三年に亘り、工費六百万圓を投じて水路の全面コンクリート工事を施し今日に至つてゐる。

私は今浜後水路土地改良及理事長として、水路に關係した役職についているが、昔この水路を南通りた人達の勞甚とし及び及感、後の世まで長くこのことと伝えたい。横堰の掘鑿に關する記録は何もなく、断片的な言い伝えとものとまとめて見れば、資料の調査、蒐集にはかなり苦勞をした。今後引つづいて調べるところがある。